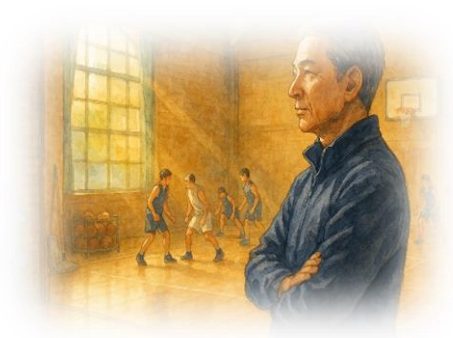


🔥「怒る」と「叱る」の境界線 (その①)

朝顔が咲き始めるころ、ふと心に浮かぶ光景がある。
体育館の片隅、静かに選手を見つめるあの先輩教師の姿だ。

多くを語らない人だった。
だが、そのまなざしには、信念と温度があった。
怒鳴り声を上げるわけでもなく、ただ静かに、凜と立つ。
それだけで、選手たちは自ら背筋を正した。
——ああ、これが「指導」なのだと思わされた。



いま、スポーツ現場に求められるものは変わりつつある。
「怒鳴られた」と涙する選手、「やりすぎでは」と首をかしげる保護者。
昭和の風を吸って育った私たちには、戸惑いもあるだろう。
けれども、見直すべきは私たち自身の「伝え方」だ。

怒る——それは**感情の放出**である。

他方、**叱る**——それは、**相手の成長を願って行う、伝える**という営みだ。

ミスをした選手に、思わず声を荒らげてしまったことがある。
だが、その直後、私は自問する。「今の言葉は、その子のためだったか」と。
怒りに動かされて発した言葉は、信頼の橋を壊す。
叱る言葉には、愛がなければ届かない。
指導とは、技術だけでなく心を育てる行為だからこそ、
感情ではなく、**信頼が選手を動かす**。

時代は、熱血という名の怒声を求めている。
今、必要とされているのは、**静かで揺るがぬ情熱**だ。

夏の朝、朝顔を見つめながら思う。
あの先輩のように、信頼を礎にした指導者でありたい……と。

